

『伝える力』を育む授業の創造

～振り返りを生かす学習過程の工夫～

大矢 裕子 高杉 廣張 大柴 玲子

1. 主題設定の理由

◆英語教育の動向から

文部科学省は、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中学校における英語教育の高度化を目標に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。中学校段階で英語教育に求められているのは「身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこと」である。

この中では「英語を用いて何をするのか、何ができるようになるのか」を意識することが重要であるとされている。適切な語句を用い、正確な文法や構造を用いて書いたり、話したりすることが基盤となり、「自分の意見を相手に伝える」「必要な情報交換をする」「相手の言葉の意図を理解する」といった活動を行うことが求められているのだと考える。

本校英語科では『伝える力』を「身の丈にあった英語を用いて、自分の言いたいこと、考えや気持ち等を話したり、書いたりするなどして伝えることができる力」と定義して研究を進めてきた。『伝える力』は、上記に挙げたような活動を行うために不可欠であると考えられる。

◆これまでの研究との関連から

平成23～25年度は、研究主題を『『気づき』を促す授業の工夫』とし、『伝える力』の育成を目指してきた。「既習の知識を活用すれば、伝えたいことを伝えることができる」という生徒の「気づき」は、『伝える力』だけではなく、ひいては、英語学習に主体的に取り組む態度の育成にもつながると考えた。

研究を進める中で、『気づき』が生徒の正確さに対する意識を高めることは分かってきた。語句や表現、文法項目を適切に用いることや、文構造や文章構成を整えること、つまり英語の「形」に関する要素を改善させることについて、以前よりも丁寧に行う生徒が増えたように思う。しかしその一方で、伝える相手や英語の使用場面を意識して、自分の書いたものを吟味し、改善することについては研究の余地があるように思う。

◆生徒の実態から

本校の生徒は単語や表現などの知識を豊富にもっており、それほど抵抗なくまとまった文章を書くことができる。それに加えて、ライティング活動の充実に取り組んできたこともあり、具体的で、つながりのある文章を書けるようにもなってきた。結果的に書ける文章量も増えてきたように思う。

しかし、そう思うのと同時に、これだけ知識が豊富であれば、正確さだけでなく伝達という意味で、より効果のあるより良い文章を書けるのではないかと物足りなさを感じることもある。それは生徒が文章を振り返る時に「相手に伝える」という視点が欠けているからだと思われる。

例えば、表現内容の割に文章中に難しい単語や複雑な文構造を用いているような場合である。「自分の書いた文章を読み手は理解できるのか」「自分の伝えたいことが伝わる文章になっているのか」と吟味することで、辞書で調べた難しい単語や、複雑な表現をそのまま使うようなことは防げるはずである。

文章を書くときに「伝えたい」という思いをもつことは重要である。生徒はその「伝えたい」という思いを原動力としてより良い文章を書くからである。しかし、その段階で終わらず、自分の書いた文章を「自分の伝えなかったことは伝えられたのか」という視点をもって振り返り、改善していくことはさらに重要であると考えられる。

2. 研究の目的

- 『伝える力』を育むために、生徒が「深く考える」授業のあり方を探ること。
- 生徒に自分の表現したものを振り返らせ、改善させるための手立てを探らせること。

3. 研究内容（全体研究との関わり）

『伝える力』をもった生徒とは、自分が表現したものに不十分な部分や改善できる部分を発見したときに、どうしたらよりよい表現ができるのかを粘り強く考えることのできる生徒だと考える。そして、全体研究でいう「深く考える」授業とは、他者からのコメントや、自分の気づきを活かして自分が表現したものを振り返り、既習知識を活用することで文章自体の改善を総合的な視点から図っていく授業のことだと考える。

本校英語科では、「『深く考える』授業の創造」に次の点から迫りたい。

- 自分が表現したものを振り返ること
- よりよい表現を模索すること

◆自分が表現したものを振り返ること

これまでの授業においても、自分が表現したものを振り返るような活動は見られた。生徒は語句や表現、文法事項、文構造や文章構成などを適切に用いて、自分が書いた文章をよりよくしていこうとしていた。実際に、文章構成について学習した時には、接続詞などを効果的に使おうとする生徒の姿が見られた。

しかし、自分では十分に伝えたいことが伝わる文章を書くことができたと思っていても、伝える相手にとっては読みづらさを感じるものであったり、もう少し詳しく知りたいと情動的に不足していると思うものであったりすることがあったように思う。これは、振り返りをして、伝える相手の立場にたって読み直してみることができていなかったからだと考える。最終的に「伝えなかったことは伝わったのか」という視点で、自分が表現したものを振り返ることができれば、表現したものは当然改善されていくのではないかと考えた。

昨年度から、自分が表現したものを振り返る活動を重視して授業研究を行ってきた。生徒たちが自力で自分が表現したものを見直すことは難しいため、「仲間との交流」を意図的に仕組むこととした。「他者との交流」は、全体研究でいうところの「視点を変える」活動にあたるものと考えており、そうすることで次のようなことが期待される。

- ・表現したものを評価、分析するための観点が明らかになる。
- ・表現したり、改善したりするための新たな視点を得ることができる。
- ・自分にはなかった考えに気づかされる。
- ・自分が表現したものに自信をもつことができる。
- ・自分の分析力にも自信をもつことができる。

◆よりよい表現を模索すること

生徒は「他者との交流」によって「視点を変える」ことができるであろう。しかし、「視点を変える」だけでは、自分が表現したものを改善することはできないと考えた。他の方策の利用も必要となる。そこで、改善につなげるために以下のことを重視していきたい。

まず、自分の表現したものを改善させるためには、既習知識が鍵となるであろう。どれだけの知識をもち、それらをどれだけ活用させられるのかによって、改善できるかどうかは大きく異なると思う。既習知識はより良い表現を模索するとき総動員される。そうすることで定着が促され、活用できるものとなるだろう。既習知識を生徒がそれぞれの文脈の中で活用できるようにするためには、普段から、知識を活用させるバリエーションを示し、どのように活用すればよいのかという視点を生徒に実感としてもたせることが重要であろう。

それに加えて、生徒が自分の表現したものを改善しようという気持ちをもてるように、表現する目的（コミュニケーションとしての意図）をはっきりと示すことは重要である。例えば、動詞の過去形を用いて、夏休みにしたことを絵日記のようにして書かせる活動はよく見られる。生徒はそれまでに学習したことを活かして一生懸命に書いてくるはずである。過去形の定着を図ることはもちろん大切なのだが、この活動の一番の目的は、楽しかったことや感動したこと、驚いたことなどを、英語を使って仲間と共有できるようになることだろう。この目的の達成のためには、適切な語句や表現を選択できることも、正確に文を組み立てられることも、相手に伝える上で重要だからであろう。そのことを生徒に意識させたいのである。

4. 研究仮説

生徒に、仲間との交流をとおして「伝えたいことが伝わったのか」を振り返らせ、自分が表現したものを吟味、改善させていくことで、『伝える力』を育むことができるだろう。

5. 研究を支える取り組みとして

○ライティングからスピーキングへ

本校英語科の研究では『伝える力』を育むことを目指しているが、ライティング活動が中心であり、スピーキング活動についてはあまり触れられてこなかった。ライティング活動では、自分の表現したものを形として残しやすいため、スピーキング活動に比べ、容易に振り返ることができるからである。しかし、生徒に表現する目的を意識させ、また表現力そのものを促進させるためには、スピーキング活動を研究の対象とする必要があると考えた。

○ワークシートの工夫

仲間からのコメントや自分の気づきを残すことは、それらを活かし、自分が表現したものを改善させることにつながる。自分の学習過程や自分が表現したものの改善の変化が目に見えて分かるようにワークシートを工夫することは効果的であると考えた。

○ICT機器の活用

仲間からのコメントによって気付かされることは多いであろう。しかし、それを取り入れて改善につなげるには、他者から言われたことを理解し、納得する必要があると考えた。書かれたものであれば、ワークシートなどに書かれたコメントを見返すことができるので、容易に振り返ることができる。しかし、スピーチやshow & tellのように口頭で表現されたものについては、コメントされたことが実感として残らないように思う。そこでiPadやビデオを用いて、自分の姿を自分で見直すことができれば、コメントがさらに効果的になると考えた。

6. 研究経過

H17～19 研究主題

『伝える力』を高める授業の工夫 ～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて6つに分類し、それぞれの『伝える力』を高めることを目的に研究を行った。その分類とは、以下の通りである。

◇『伝える力』の分類

- ①聞き手に十分に伝わる声の大きさを音読したり、英語を話したりすることができる力。
- ②スピードや抑揚、間などを大切に音読したり、話したりすることができる力。
- ③伝えたい内容に見合った身振り・手振りや、事例・実物などの提示を交えて、聞き手を意識し効果的な発表をすることができる力。
- ④教科書の基本文や本文で使われている表現などをモデルとして、既習の学習事項や語句・語彙をできる限り用いて伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力。
- ⑤知っている語句や優しい表現を用いて説明したり、言い換えたりすることによって、聞き手や読み手の理解を助けることができる力。
- ⑥文の配列や順序性を吟味して、伝えたい内容を話したり、書いたりすることができる力。

H20～22 研究主題

『伝える力』を高める授業の工夫 ～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

H20～22年度までの3年間は、それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し、効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために、伝える表現を考える前のレディネスづくりに取り組んだ。また、『伝える力』の基礎・基本となるよう、帯プログラム活動も整備した。

『伝える力』を伸ばすために、生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方、教師の役割などを捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現するためには、伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。また、自ら学習する生徒を育成するためには、「問い」と『気づき』の繰り返しが重要であると感じた。

7. 研究の実際

◆授業実践について ※中等教育研究会公開授業指導案より抜粋

1. 単元名 疑問詞を用いて相手のことを深く知ろう

2. 単元について（全体研究との関わり）

「疑問詞を用いることで、ある話題について詳細にたずねたり、相手のことを深く知るために質問したりすることができる。」本単元の学習を終えたときに、生徒にこのような気づきが促されるよう指導にあたりたい。疑問詞の「形」や「意味」を理解させることはもちろんだが、「使用」についても目を向けさせたい。

そのためには、Presentation（提示）practice（練習）production（産出）型（以下PPP型）の授業に加え、タスクを取り入れた授業が有効であると考えた。本単元の学習は全9時間で計画されているが、1時間目～8時間目をPPP型、9時間目をタスク型とし、8時間目までに個々に学習してきた疑問詞を、9時間目に行うタスクにおいて総合的に使用するという授業の流れを考えている。

Ellis（2003）によると、タスクの条件は以下のように定義されている。

- （1）意味に焦点がある
- （2）実際に起こりうる言語のやりとりがある
- （3）スピーキング、リーディング、リスニング、ライティングのうち1つ以上のスキルが含まれる
- （4）タスクを成し遂げる際に、自然な認知プロセスが含まれる
- （5）成果を示すことが求められる

この定義にもとづき、9時間目の授業では「音楽（テレビ）の一番のファンを探し出す」という活動を行う。「一番のファン」を探し出すには、相手から具体的な情報を聞き出さなければならない。そうせずにはいられない状況におかれた時、生徒は疑問詞を自然に使うのではないかと推測される。また、生徒は状況に応じてどの疑問詞を用いれば良いのかを考え、判断して選択することになる。1時間目～8時間目までに個々で学習してきた疑問詞を総合的に活用する機会を与えることにもなり、疑問詞というものの自体の「使用」に目を向けられるようにもなると考える。

文法事項の「形」や「意味」を理解することにとどまり、その理解にもとづいて表現を行っている状態、全体研究で言うところの、「自分なりの結論」をもって満足してしまっている状態にゆさぶりをかけ、「使用」にまで目を向けさせて表現させることを、本授業（本単元）ではめざす。相手のことを深く知るために、相手から具体的な情報を聞き出す活動が、授業の軸になるが、活動の間に教師からフィードバックを行う。これが、全体研究でいう「視点を変える」活動にあたり、生徒に疑問詞の「使用」を意識させるための手立てとなると考えている。

3. 本時の授業について

- （1）日時 平成27年10月3日（土） 11:10～12:00
- （2）場所 1年3組教室
- （3）本時の目標

- ・質問する内容に応じて疑問詞を使い分け、疑問詞の「使用」について考えることができる。

(4) 展開

Procedure	Teacher's Activity & Help	Students' Activity	Remarks
Greeting & Small talk (3分)	<p>あいさつ</p> <p>How are you? How's the weather? What day is it today? What's the date today?</p> <p>目標の確認</p> <p>○[もっと知ろう, 仲間のこと]という目標を示す</p>	<p>I'm fine/sleepy/tired. It's sunny. It's Saturday. It's October 3.</p> <p>○本授業の目標を確認する</p>	英語の授業に意欲的に参加する雰囲気を作らせる
Activity (40分)	<p>活動の説明</p> <p>○4人グループを作らせる</p> <p>○以下の内容を説明する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で「一番の〇〇ファン」を探す ・グループ活動を2回行う ・1回戦のトピックは“TV” ・「一番の音楽ファン」を探すには次の情報を得ることを目指す <ul style="list-style-type: none"> たくさん何かを知っている たくさん何かを持っている たくさん何かをしている ・特に順番を決めずに, フリーで質問し合う ・時間は5分間 	<p>○4人グループを作る</p> <p>○説明を聞き, 活動を理解する</p>	説明が複雑にならないようシンプルな英語を用い, 必要であれば日本語で補足する
	<p>グループ活動(5分) 1回目</p> <p>○グループ内で質問させ合い, 「一番のTVファン」を探させる</p> <p>○グループごとに, 以下の内容について発表させる</p> <p>①「一番のTVファン」は誰か ②その人を選んだ理由</p>	<p>○お互いに質問し合い, 「一番のTVファン」を探す</p> <p>○グループごとに, 課題①, ②について発表する</p>	<p>活動中は机間巡視をして生徒をサポートする</p> <p>前もって発表させることを予告する</p>

	<p>フィードバック(視点を変える活動)</p> <p>フィードバック①</p> <p>○活動内で使った「これは良かったと思う質問」を書かせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疑問詞を用いた文を例示することで既習事項を思い出させる ・生徒の文に出てこなかった疑問詞を取り上げて示す <p>フィードバック②</p> <p>○生徒を指名し、深く質問をする様子を見せる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の答えをよく聞いて、さらに質問をするように伝える 	<p>○「これは良かったと思う質問」を書く</p> <p>○指名された生徒と教師の会話を聞き、深く質問していくやりとりを確認する</p>	<p>グループ活動 2回目で疑問詞を用いた文がさらに使われるように</p> <p>相手のことをさらに深く知るためには、追加で質問をすることが大切だと気付かせる</p>
	<p>グループ活動 2回目</p> <p>○トピックを“Music”とする</p> <p>○グループ内で質問させ合い、「一番の音楽ファン」を探させる</p> <p>○グループごとに、以下の内容について発表させる</p> <p>①「一番の音楽ファン」は誰か ②その人を選んだ理由</p>	<p>○お互いに質問し合い、「一番の音楽ファン」を探す</p> <p>○グループごとに、課題①、②について発表する</p>	<p>・フィードバックされたことを意識しているか</p>
<p>Consolidation & Greeting (7分)</p>	<p>活動の振り返り</p> <p>○学習したことを記述させる。</p> <p>あいさつ</p> <p>Good bye, everyone. Have a good day. Thank you.</p>	<p>○学習したことを記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で使った質問文(英語で) ・授業をとおして学んだこと ・できるようになったこと <p>Good bye, Mr. Takasugi. Thank you. You, too.</p>	<p>まとめシートを用い、個人で振り返る時間を設ける</p>

◆授業の考察

公開授業ではタスク活動を取り入れた。疑問詞を使うことが前提となるような活動ではなく、ある目的を達成するためには疑問詞を用いることが有効であると生徒が気付くような授業を意図的に仕組むこととした。「一番のテレビ〔音楽〕ファンを探す」という本授業のタスクを達成させるためには、相手にどのような質問をすればよいのかを、生徒自身が判断する必要があった。生徒は相手の発言に応じて変わっていく状況に、既習知識を柔軟に活用しながら

対応していかなければならず、教師や仲間からのフィードバックを足がかりとして自分の既習知識にアプローチする経験を積むことができたと思われる。

本授業では「視点を変える」活動として、グループ活動（2ラウンド制）の間に2種類のフィードバックを行った。一つは1ラウンド目のグループ活動で使用した英文をクラス全体で共有することで、もう一つは、生徒と教師とで対話モデルを示すことである。前者は生徒が既習の疑問詞を用いたさまざまな英文を思い起こすことをねらいとし、後者は相手の答えに応じて追加で質問する例を示すことをねらいとした。

今年度は個の生徒の姿を追うことによって授業の実態をとらえようとした。英語科では授業者による観察とICレコーダーによる記録から見とりを行った。1ラウンド目のグループ活動では、相手のことを深く知るためにどうすればよいのか、具体的なイメージをもてない生徒がいたように感じられた。ある生徒は1回目のグループ活動で“Do you watch TV?”と質問したのみで、さらに疑問詞を用いるなどして、相手の答えを聞いて追加で質問する姿は見られなかった。しかし、その生徒はフィードバックを受けたことにより、2回目のグループ活動で、疑問詞を使って質問しようとする姿勢や、相手の言ったことをよく聞いて追加で質問しようとする姿勢が見られた。

生徒はグループ活動の中で他の生徒がした質問や受け答えを聞くことによって、疑問文の使用について少なからず影響を受けていたと考えられる。生徒の様子に変化が見られたのが、「視点を変える」活動による効果なのか、仲間との交流によるものなのかはわからなかった。生徒の姿をどのようにして見とるのかについてはさらに検討が必要であろう。

今回の授業実践を通じて、タスク活動を行うには、次の2点に留意する必要があるということがわかった。第一に、生徒がタスク活動の目的を十分に理解しておかなければならないということである。目的に照らして振り返り、自分の表現したものが不十分であると感じたときにはじめて、生徒は自分の表現したものを吟味し、改善しようとするだろう。そして第二に、タスク活動に至るまでに、十分なインプットが必要であることである。タスク型の授業の前に、PPP(Presentation-Practice-Production)型の授業を行い、十分にさまざまな疑問詞をもちいた文に触れておいたことで、タスク活動をスムーズに進めることができたように思う。

このほかにも「深く考える」授業を構成する上で配慮したことがある。一つは生徒たちにとってリアルな情報を扱うことである。本授業では、生徒同士がコミュニケーションをとることによりタスクの達成を目指した。テレビや音楽は、生徒にとって身近ではあるが、仲間から意外な情報が得られる話題でもあり、仲間とのやりとりが自然に生まれると考えた。もう一つに、授業の最後に学習したことをまとめる時間をとったことである。自分の学習を振り返る時間を確保することで、何を学習したのかだけでなく、学習したことによってどのようなことができるようになったのか、グループ活動やフィードバックをとおして、自分にどのような変化が見られたのかなどを、客観的に振り返ることができると考えた。

8 本年度の研究のまとめ

◆「深く考える」授業について

本校英語科では、「深く考える」授業を生徒が自分自身の気づきや他者からのフィードバックにより自分の表現したもの（全体研究でいうところの「自分なりの結論」）を振り返り、既習知識を活用することで改善を図っていく授業だと捉えている。生徒が自分の表現したものの改善を図っていくには、表現のもととなっている既習知識や、リスニング、リーディングなどによって得られた情報などを再度吟味していく必要があるだろう。場合によっては、自分のものごとの見方や考え方を見つめ直していくことも求められるだろう。

これまで英語科ではライティング活動をとおして「深く考える」授業の創造に迫ってきた。事前研究会では、生徒が宝物について書いた文章を読み合い、コメントする活動を取り入れた。しかし、話して伝えることを目的として書かれた原稿に対し、読んでコメントすることは実際にはほとんどない。そこで、今回は文章を読み合う活動に加え、スピーキング活動を取り入れた。生徒は自分が書いた文章を仲間に見てもらおうのだが、その後、それ以外の仲間へ書いた文章を話してみても、聞きとってもらった。仲間メモしてもらった内容や印象に残ったことなどを活かして、生徒は自分が伝えようとしていたことが相手に伝わっているのかを確かめ、自分の文章の改善を図っていった。仲間からのフィードバックが自分の表現したものを振り返るためのきっかけとなり、改善を図ろうとする生徒の意欲につながる様子が見られた。

しかし、生徒がお互いに指摘し合えることには限りがある。ライティング活動では、文章を見る時間が確保されているため、どうしても英語の正確さに着目し、単語の綴りや語順などを訂正しようとする生徒が多い。その一方、ス

スピーキング活動では、文章の内容に着目してアドバイスする生徒が多くなる。文章の改善に際して生徒が何に着目するのは、ライティング活動なのかスピーキング活動なのかによって異なるであろう。また、生徒によっても異なるであろう。生徒同士のフィードバックは確かに有効であると思われるが、すべてを生徒に委ねてしまわず、教師が授業のねらいをふまえた上で、どのようなフィードバックがよいのかを事前に考えておかなければならないだろう。

◆『伝える力』を育む授業について

本校英語科では、振り返りを生かす学習過程の工夫をとおして、『伝える力』を育む授業の創造を目指している。振り返りとはどのような知識を得たのかを振り返ることではなく、得た知識によってどのようなことができるようになったのかを振り返ることだと考える。今年度の公開研究会での授業を例にするならば、疑問詞やそれらを用いた文の意味や形を振り返っただけでは『伝える力』を育むには不十分だということである。疑問詞を用いることでどのようなことを伝え合えるようになったのかを生徒が振り返ることによって、『伝える力』を育む授業の創造に迫ることができると考えている。

『伝える力』を育む授業を構成するにあたり、生徒には相手意識を常にもってほしいと思う。書いて伝えるにしても、話して伝えるにしても、生徒には自分の表現したものを受けとる相手の存在を忘れずにいてほしいと思う。文章の内容や含める情報を吟味するにしても、文章の正確さを高めるにしても、その目的は相手に伝えたいことが伝わるようにするというにあるからだ。疑問詞を用いて相手に質問するにしても、自分が知っている限りの疑問詞をすべて用いて、質問攻めにするのを生徒に求めているわけではない。何か1つの質問をしたとき、その質問に対する相手の答えに応じて、既習知識から最善だと思われるものを取捨選択しながら、相手のことをさらに深く知るためにさらに質問していこうとする姿勢を生徒にはもってほしいと願っている。

9 来年度の研究について

これまで英語科では「仲間との交流」を「視点を変える」活動の一つとして考えていた。もちろん「仲間との交流」は英語の授業において欠かすことのできない活動であるが、それだけでは「視点を変える」活動とはよべないと考えた。それは、生徒が「仲間との交流」において、自分の表現したものを吟味し、改善を図っていくためのきっかけとなる活動こそが「視点を変える」活動であると捉えたからである。そこで英語科では、フィードバックを「視点を変える」活動の一つとして位置づけたいと思う。

来年度は全体研究で「視点を変える」活動の有効性についてまとめていくこととなる。効果的なフィードバックの在り方を探るとともに、フィードバックが「深く考える」授業、そして、『伝える力』を育む授業の創造に直接つながるのかを考えていきたい。そのためには生徒の様子を詳細に見とる必要があるだろう。具体的には、授業で生徒がどのような様子を見せると予想しているのか、生徒の様子がどのように変わっていくと期待しているのかなどを事前に示し、その想定を実際の生徒の様子と比較することで迫れるものと考えている。

昨年度から、「深く考える」授業のモデルとなるようなライティングの授業を提案してきたが、今年度の事前研では、ライティングからスピーキングへの移行を始めた。英語科の考えるライティングにおける「深く考える」授業の一例を示すことはできたと考えている。また、公開研究会では、スピーキングにおける「深く考える」授業についても模索した。英語の授業において4技能の統合が重要であることは強く感じている。本研究においてもリスニングやリーディングにも目を向けていく必要があるだろう。『伝える力』というときには、書くことや話すこと(アウトプット)に焦点をあてがちだが、アウトプットにはインプットの質と量とが大きく影響を与えると考える。引き続きスピーキングの授業を中心に研究を進めていく予定ではあるが、効果的なインプットについても検討していきたい。

7 参考文献等

- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要(平成23~26年度)
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 外国語編」平成20年9月